
けいおん ~もう一人の幼なじみ~

タカメン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん ～もう一人の幼なじみ～

【Nコード】

N7791Z

【作者名】

タカメン

【あらすじ】

澪には幼なじみがもう一人いた！？

けいおんの二次創作です

初心者なので読みにくいですが頑張って行くのでよろしく願います

いろいろアドバイスを下さるとありがたいです

初めてなのでいろいろな先生の作品を参考にしています

とても更新は遅いです

基本設定(前書き)

一応作ってみました

基本設定

基本設定です

主人公

光明嵐

身長175cm 体重60kg

漣と律とは小学校からの幼なじみ主人公は漣に一目惚れしていて律はそのことを知っているそしてたまにアドバイスをもらっている律とは昔からの友達といった感じ

頭はそれなりよく数学と理科は漣よりいいが他は負けている

パートはベース

顔は少しほっそりしている

髪は基本黒だが少し茶色がかっている

顔のレベルは中の中ぐらい体格は細いが筋肉がある

走るのは速く器械体操や水泳はよく出来るが球技は全然ダメである
趣味は読書と音楽を聴くこととダラダラすること

基本設定（後書き）

これからどんどん足されて行くと思います
感想 アドバイスよろしくお願いします

第1音 入学式（前書き）

本編に入りました

アニメでやる少し前までです

第1音 入学式

暖かい春の日にゆっくり歩き男がいた

俺 光明 嵐である

この春より共学校になった桜ヶ丘高校に入学した高校1年生だ

「おゝい、嵐」

「律、待ってくれよ」 急に走り出すなよ 「あつ嵐！」

向こうから走ってくる広いおでこがトレードマークの女子は幼なじみの 田井中 律だ

その少し後ろを走ってる背が高く黒髪の少し大人っぽい女子はこれまた幼なじみの 秋山 漣だ

「おゝ漣、オハヨ」

「なんで漣だけなんだよ」

「おはよう嵐、いや、一人で心細かったんだ」

「って、漣まで！？ てゆーかさつきまで一緒に歩いてただろ」

そんな感じで律をからかっていたら校門前に着いた

「よーし着いた〜……どこに行けばいいんだっけ？」

「そんなぐらい覚えておけよ……あそこの昇降口にきまつてんだろ」

そして昇降口に着いた俺達はそれぞれのクラスを探した

光明だから、こ、こ、……… 1組みたいだ。 漣達は？

「私は…… 2組だな！ 漣は？」

「私も2組みたいだ」

マジかよ……

「嵐は？」

「…… 1組……」

「じゃあ嵐だけ違うのか〜」

そして1組の前に着くと

「じゃあここでお別れだな じゃあまたあとで」

すると律がいきなり寄ってきて

「愛しの漣ちゃんと別れて残念だなあ 嵐？」

と小声で言ってきたやがったので デコピンをくらわせてやった

「いったいなー何すんだよ〜」

「どーせまた律が変なこと言ったんだろ ほら行くぞ じゃあな〜嵐」と言っ 行ってしまったそしてそのあと入学式がありそれが終わったあと自己紹介等をして今日の授業(?)は終わった

そして最後に担任が

「クラブ見学は自由だ 今日行かなくても明日新入生歓迎会があるから それには出るよ〜」

と言っていた

多分漣は文芸部に入るだろうから入部届けは文芸部と書いておいた多分俺と漣が入っていれば律も入るだろうと思っていた

しかし次の日それは甘かったことに気づいた

第1音 入学式（後書き）

皆さんのご意見やアドバイス、リクエストには出来るだけ答えて行きたいのでよろしくお願いします

第2音 廃部（前書き）

やっとアニメ本編に入りました

唯は次回には登場できる予定です

第2音 廃部

次の日

俺はかつたるい新入生歓迎会に強制的に行かされた

感想はあまりないがあの中でやっぱり溲が入るとしたら文芸部だろう
先輩優しそうだったし

あと元女子高だけあって運動部が少ない
だから今年出来た部活もいくつかあるみたいだ

それに今年新入生が入らなかつたら廃部なんていう部活もあるみたいだ

まあそんなことはほつといて早く入部届けを出しに行くとしよう

すると職員室で聞いたことのあるアホみたいな声が聞こえてきた

「けいおん部って廃部になっちゃったんですか？」

「ええ、正確に言うと廃部寸前ね今月中に4人入らないと廃部になっちゃうの
去年は3年生がいたんだけど……」

どうやら律がさっき新歓で言った部活に入ろうとしていたようだ

「律何やってんだよ〜さっきの新歓の話し聞いてたのかよ？って漣はなんでここにいるの？」

「ああ、嵐聞いてくれよ律のやつ私が文芸部入部届け書いたらそれを破いたんだ」

俺は一瞬怒りが湧いたが漣の　しょうがないな　って顔を見ると不思議と怒りがおさまった

「でももう廃部したんだっいたらいいだろ　ほら、律いつまで立つてるんだよ早く行「もしかしてこれはチャンス？」…はああ！？」

「今入部したら私が部長…悪くない…」

「律、何言ってるんだよ〜？」

「よーしそうと決まったらさっそくあと一人入部希望者を集めるぞ」

「はあ！？いきなり何言いだすんだよ？だいたい4人必要だからあと3人だろ？」

「？」

いやそんな 何言っただコイツ？ みたいな目で見られても…

……

「嵐…もう現実から目を背けるのばやめよう 律がこう言い出したら止まらないだろ」

律のアホめ……

そして俺達は音楽室で入部希望者を待っていた
……来るのかなあ？

ガチャ

「あのー入部希望なんですけど」

そこにはいかにもお嬢様っぽい金髪の子が立っていた

「けいおん部に!？」

「いえ、合唱部…」けいおんにしてください」「はい？」

「おい律強引に誘うなよ」

「そつだぞ、 やっぱり私も他の部活に行くよ」

「えー、漣ー嵐ーやろつよ 約束しただろ」「してない」「でも」

漣が行くならそろそろ俺も……

「楽しそうな部活ですね私キーボードぐらいしか出来ませんがど入部しても良いですか？」

もちろん承諾していまここに新しく誕生した

第3音 入部（前書き）

唯が入部します

作者がけいおんを熟知してる訳じゃないのでアニメとはいくつか違うところがあったり抜けてる部分がありますが大目に見てください

第3音 入部

けいおん部が出来て数日後俺達はさっそく練習をするのかと思いきやなぜか部室で紅茶を飲んでいた……

「おかわりいかがですか？ あとケーキもありますよ」

しかもそれはあの日来た 金髪の子 琴吹 紬 が家からもってきたものだ

スゲーうまい。しかもカップも超高そうなティーカップだし

「こんな高そうなもの良いのか？ ムギ？」

漣はいつの間にか琴吹のことをムギとか呼んでるし
あいつはいったい何者なんだろう？

「良いのよ、家からあまってるお菓子とか持ってきてるだけだし」

追加

あんな高そうなものが余ってるなんて本当に何者なんだろう？

ガチャ

「おーいけいおん部に新しい部員が入るみたいだぞ〜」
するといきなり律が入って来た

「いきなりどうしたんだよ？」

「聞いてくれ さつき文化部を管理している先生から聞いたんだけどな〜 朝けいおん部に入部届けを出しに来た生徒がいたんだって〜 多分もうすぐで来るはずなんだ」

「ふーん」

「全然嵐は興味なさそうだな」

しかしいつころに入部希望者は現れない

「俺 教室に忘れ物したから行ってくる」

「なんだよ結局嵐も気になるんじゃないか〜」

アホがなんか言ってきたけど無視！

コッ

「そついつことを言うんじゃない!〜!」

どうやら瀧がデコピンをやってくれたみたいだ

やっぱり凄優しいなあ

「嵐は照れ屋なんだから!」

……聞こえなかったことにしよう……

ドアを出るとすぐそこにドジそうな茶髪の子がいた

さっき言ってた子だと思いをかけてみた

「ねえ、君がもしかして入部希望者?」

少し笑顔で聞いてみた

「ひいひい」

なんで声かけてただけでこんなに怖がられるんだろう?

「あつ、ごめんなさいちょっとちがつこと考えてて」

「君入部希望なんですよ　ひとまず入りなよ」

俺は氣力を絞りその言葉を言った

「入部希望者だぞー……」

「おおーようこそーってなんでそんな嵐落ち込んでんだよ？」

俺そこまで顔ひどくないと思ってたんだけどなあ　実際はそうなのか
なあ？

「まあいいや　ムギお茶の準備だ！」

「あ、あの　えっと、」

俺の落ち込みを10秒で片付けた部長　と何かいいたげな茶髪

何かいいたげな顔してるけどどうしたんだろう？
思った以上にひどかったとかかな？

どちらにしろコイツはせつかくの部員（獲物）なんだから逃がしち
やダメだな

「まあとりあえず座りなよ、えっと……？」

「あ、私平沢 唯です」

「よろしく平沢さん。まあとりあえず琴吹さんの紅茶飲んでみてよ

美味しいから」

そういうとゆっくり飲みはじめた
そして幸せそうな顔をする平沢さん

「嵐、いつもと感じ違うくないか？」

どつちやら溲たちはまだ気づいてないようだ

「平沢さんなんか手応えが良くない。部費のためにもここは逃したらダメだ」と小声で言った

「平沢さんはなんでこの部に入ろうと思ったの？」

音楽に興味があるなら食いつくはずだ

しかし……

「えっと軽い音楽って書いてあったんで口笛とかかと思ってて」

マジかよ……少なくとも口笛はないと思っぞ

「じゃあどんな楽器なら出来る？」

ナイス律！これはどうだ？

「カ、カスタネットじゃなくてハ、ハーモニカ！」

最初カスタネットって言ったぞ。これは嘘だろ

「ハーモニカならあるから吹いてみ」ごめんなさい吹けません！」

やっぱり……

「あ、あの、今日ここに来たのはここに入るの辞めさせてくださいって言いに来たんです！」

マジかよ……！

最初の表情はそういうことだったのか 多分もう無理だな。

「そんなこと言わずにねえお願いだよ」 平沢さくら 毎日お茶
するだけで良いから」

「おい律もう無理に誘うな悪い印象が付くだろ」

「そつだぞ律 嵐の言つ通りだ」

「でも」

そんなふうに言い争っているところとうとう泣き出してしまった

平沢さんが……………

「こんなに迷惑かけてしまっって本当にどうしたら良いか……………軽い気
持ちで書いてしまっって 本当にごめんなさい」

まるで子供が泣き出すように大粒の涙を流していた

「じゃあ俺達の演奏だけでも聞いて行っってくれ」

「演奏してくれるの!?!」

……………めっちゃ食いついた

そんなこんなで演奏することになった

曲名は「翼を下さい」だ

あの結成した日からそんなに日が経っていなかったが それなりに
うまく出来た

そして平沢さんの様子は……

キラキラキラ

すごい笑顔だった

「どろどろでしたか？」

「あの、うまく言葉に出来ないんですけど あんまりうまくない
ですね……」

今律が心の中で「バツサリだー」と行ったような気がした

「でもすごい感動しました！私この部に入部します！」

そうして新しく平沢さんを加えたけいおん部はやっとスタートラインにたったのであった

第3音 入部（後書き）

やっとアニメ1話が終わりました

これからは1話1話を長く出来るようがんばります

第4音 楽器！（前書き）

アニメ2話目です

あけましておめでとついでいます

こんな小説ですがことしもよろしくお願いいたします

第4音 楽器！

とうとう（やっと）けいおん部がスタートした

スタートした次の日 俺は少し早く部室に行こうとしたしかしその日は掃除当番だったので30分ほど遅れてしまった

今日からけいおん部が始まると思うとワクワクして授業中も眠れなかった！

いざドアを開けて見ると……

いつもどおりティータイムをしていた……

「ヤッホー 嵐遅いぞ〜」

ゴン！

「何すんだよいったいな〜」

「遅いのはおめーらだろもうとっくに練習始めてるもんだと思ってたわ！」

「ゴメン嵐、私は止めようと思ったんだけど……」

遷が止めようとしたらしいけど無理だったみたいだ。まあ止めよう

としてくれただけありがたいけど

「まあまあコウくん落ち着いて〜」

なぜか平沢は俺のことをコウくんと呼ぶようになった　ちなみに琴吹は嵐くんである

「っていつかおまえギターは？」

「ああそっか。私ギターやるんだっけ」

そこからかよ意識すらないなんて……いやここに入ったことを覚えてるだけマシか

多分それは俺達の演奏が大きかったと思う

あの時は

俺と漕がベースで律がドラム、琴吹がキーボードだったのでギターがなく迫力に欠ける感じだったが　なんとかイケた

しかしやはりギターは必要なので平沢が入ってくれて本当に助かった　だから少し期待していたが平沢はギター初心者だからギターを持っていないことを忘れていた

「ねえ、ギターっていくらぐらいするの?」

「安いやつは1万台からだな、けどあんまり安すぎても良くないから5万ぐらいがちょうど良いな」

「部費で落ちませんか?」

平沢が満面の笑顔で聞くと

「落ちません!」

すると律も満面の笑みで反した

「どうしよう私のお小遣10ヶ月分だよ」

まあこればかりはしょうがない

「よし!お金はなんとかするから週末買いに行こう!けどどんなのが良いの?」

「口で教えるのめんどくせーから俺も一緒にいくよ ちょうど買いたいものあったし」

「じゃあ今度の土曜日皆で唯のギターを買いに行こー」

「けいおん部として動くのはこれが最初だな」

「私こういうのにあこがれていたの〜楽しみ〜」

次の土曜

駅前に行くとき、透達が待っていた。平沢がブンブンと両手を振っている。どうやら一番最後みたいだ。

「コウくん、早く〜」

恥ずいから止めて欲しいなあ。でも言っても意味ないということがわかってきたから言わないけど。

「で、どこの店に行くんだっけ？」

「あ、それはね〜こっちだよ〜」

そう言われ俺達は平沢が案内する楽器店に入ってしまった。

途中いろいろな誘惑に律や平沢が負けそうになってたがなんとかここまで連れてきた。

「5万のギターだったらあっちの方〜わ〜このギターかわいい〜」
「聞いてちゃいねえし……」

平沢が一目惚れしたギターはネックが太く重い女子にはキツイものだった。

（作者が楽器の知識がないので詳しい説明は出来ません）

「そんなの女子には無理だって　しかもそれ25万もするじゃん」

「ほんとだ〜じゃああきらめるよ……」

あきらめると言っているもののその目はじっとそのギターを見つめている

すると律が

「よしじゃあ皆でバイトするか　唯の楽器を買うためにやるぞ〜」「オー」「」

律達が大きく拳を突き出した

俺は当然やらなかった

漣もそうだろうと思ってみると小さく上げていた
今までの漣だったらしめていなかったただろうがけいおん部に入って変わった、いや変わろうとしているのかもしれない

そして皆上げていて、しかも期待を込めた目で見つめて来るので仕方なく俺も拳を突き出した

第4音 楽器！（後書き）

作者に文才がないので主人公と漣 漣と律の書き分けがうまく出来ませんアドバイスをいただけるとうれしいです

あと漣がヒロインの話なのに漣があまり会話の中心にいないのとムギが空気になってしまいました

第5音 バイト (前書き)

めっちや短いです

第5音 バイト

「私フツのバイトするのが夢だったの〜」

そんな夢を語っているのはどうやらお嬢さまらしい琴吹だ

今俺達はバイト選びをしている

「ここなんてどう？ 時給950円！まかない飯出ます！だって！」

「何のバイトだよ？」

「ウエイトレスだよ コウくん」

「律やめるその言い方、キモいし平沢と区別がつかねえしかも遷には無理だろ」

遷は自分がウエイトレスになった所を想像して煙を吹いていた

「ウ〜ンじゃあメイで」

「そっちかよしかもメイって…まあさっきよりはマシ」

「唯のためにどんなバイトでもやる！」

どうやら澁は決意したようだが変なものをやらせる訳にいかないの
で必死で探した ……これなんか良さそうだ

「じゃあこれにしてみろよ」

それは

「『『『交通量調査？』』』」

次の日俺達はバイトをしたいろいろハプニングがあったがなんとか
1人8000円貰えた

「これで唯の最初のと合わせて9万かゝあといくつかやらないとな
」

すると平沢が金を返してきた

「やっぱりこのお金は皆で使って！ 私あのギターあきらめる
から だって皆と早く練習したいもん」

そしてやはりあのギターを見ている
「よし、やっぱりアルバイトしよう！
のかけたとき

琴吹が交渉してくれた。するとあのギターがなんと5万で売って
くれることになったらしい

「この店うちの系列なの」
それでも出来ることとできないものがあると思うぞ

まあそんなことは置いといて、とうとうけいおん部がスタートした。

第5音 バイト (後書き)

い 作者は受験生なので更新ペースがどんどん遅くなるのでご了承ください

第6音

テスト！（前書き）

遅れてすみません アニメ3話です

第6音 テスト！

さあ今日こそ練習出来る！

と思っていた 平沢には「サルでもわかるギター」という本を渡しておいた まあ仮にサル以下だとしても俺達がわかることは教えればいいと思っている

そしたら担任が驚きの一言を言い放った

「明日からテストだから今日部活はないぞ」

マジかよ！てゆうーかどんなけ練習の邪魔すりゃあ気が済むんだよ？
そんな愚痴をひたすら心の中で言っていた

そして次の日テスト当日

1時間目の教科は数学からだったので余裕だった 次の国語で力を使いすぎたのが悪かったのか3時間目の英語は長文の途中で寝てしまった他の教科はとれたものの英語は絶望的だった

その帰り道平沢が真っ白だったのが気になった

そして帰り道漣と途中の道で分かれ律に漣の情報を聞いていた

「今日漣のテストはどうだったんだ？」

「国英社はいつもどおりみたいだあと理数もまあまあらしい」

澁のまあまあだから75前後だな

「いや〜でもあそこまで文系だった澁を理数も取れるようにしたのは凄いなあ」

「当たり前だろ澁に教えるために感覚的に解いていた数学を猛勉強したんだからな」

「まあ結局は私が澁が理数が苦手だったって教えたおかげだな」

中学の時この道で律から「澁は理数が苦手」といったから参考書を買いまくって勉強したのだった

「そついやおまえは？」

「私はいつもどおり溲に一夜漬けて教えてもらったから楽勝　お前もどうせいい点とったんだろ」

「当たり前だろ」

英語以外はな

英語はやばい長文は白紙で大問6まであるうちの4は長文だったから文法ほぼ満点じゃないと無理だな

そして運命の答案返却の日

数学は丸しかなかったし理科も1つしか間違えなかった国社もクラ
ス3番ぐらいらしい

問題の英語は…1つめの数は3だった少し安心したしかし2つめの
数はなかった…つまり3点だった…追試確定だ

しかし過去には捕われず前向きにと決心した俺は部室に向かった

すると皆でティータイムをしていた

「いや〜やっと終わったな〜」

「高校生になって難しくなって大変だったわ」

「そもそもっと大変そうなやつがここに……」

澪が指差した先には虚ろな目をした平沢がいた

「クラスでただ一人追試だそうです……」

「大丈夫よ、勉強のしかたが悪かっただけで次は大丈夫よ」

「俺だって追試だから大丈夫だ」

「そつだよもう一度勉強がんばればいい……ってなんでコウまで？」

「そつだよ私の勉強してないだけだけどなんでコウくんまで？」

「勉強してなかったのかよ……俺はテスト中寝ただけだ」

「まったく……嵐は高校でも一緒かよ」

.....

「で、なんでやらなかったんだ？」

「いやあ、勉強中って他のことに集中しちゃっつじゃん？」

「まあたしかに妙に掃除がはかどったりな」

「だからついギターの練習を……」

「で、追試はいつなんだ？確かそれまで部活禁止だろ？」

「えーと確か明日かな？でも少し前にちやちやっと思えばいいよね」

「お前はそれが出来るのかよ？ 漣に教えてもらえよ」

「そつだぜ！ 漣うまいんだ一夜漬け教えるの！」

「フツーに教えるよ！」

「私も行きます。せつかくだから嵐さんも来ませんか？ 英語追試なんでしょう？」

「女子の家はキツイからパス」

「だったら漣の家にしないか？ 漣んちだったら平気だろ？ なんども行ってるし」

律がにやにやしてたのが気になったがまあそこは大目に見てやろう

「はあ、仕方ねえから行くよ」

.....

次の日

昨日はいろいろあったが遷のおかげで助かった

見事テストで2人とも満点をとることが出来た！

明日こそは本気で出来る！
そう思うとなんだかワクワクしてきた

第6音 テスト！（後書き）

作者の勝手な都合ですが文才がないので好きじゃない話は内容が薄くなったり話自体をなくしてしまったりしますがご了承くださいませ

あと作者が忙しくなりそうなので更新が遅れるかもです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7791z/>

けいおん ~もう一人の幼なじみ~

2012年1月6日03時51分発行